

全く衣食住を他に求むる必要なかりしが爲にして、決して國民が發展的要素のない故でもなく、膨脹的性を有せざるわけでもない。吾等の先神先人程、發展的、膨脹的、雄大剛健な性能素質を有してゐたものは、世界に類がない。これに關しては、前著第二編第二章の六に、雄大なる性能剛健なる素質と題して、詳かに論述しておきましたから此處には略します。

然るに世人、或は古代希臘人が二千五六百年前に、鑛山を採掘せる事や、同時代に羅馬人が西班牙に於て水銀を採掘せる事や、コロンブスの亞米利加發見さては葡萄牙のバスコダガマの亞弗利加の開墾等を捕へ來つて、彼等を精力主義である、活動的であると賞するけれども、我神代の昔に己に銅、鋼、鐵類を採掘して劍刀神鏡等を鑄たる工業的知識は勿論、早くも諸神が海外に活動遊ばされたる實跡に思ひ至れば、殆ど比較にならぬではないか。

人口増加と耕地 處で今日までは右の如く我國は、何等生活上の顧慮はなく、頗る泰平無事であつたが、今日以後人口の増加に對して、現状の儘で自衛自給に差支へないであらうか、どうか。大正四年の調査によれば、人口(朝鮮臺灣を除く)は五千四百四十三萬餘人にして、一ヶ年約六十萬人の増加率ださうである(或は八十萬)。一體自然界の生物は非常の増加率を以て蕃殖してゐるものである。英國經濟學者マルサス氏(一七六六年生)は一七九八年「人口論」を著し「人口は幾何級數を以て増加し、食物は算術級數を以て増加す」というて、生物の増加率の驚くべき事を論じ(是れ罪惡不徳の行はる、所以、宜しく)てあつた。此幾何級數の増加は、俗に鼠算といふので恐しい勢ひを以て増加するものである。豊太閤が秘藏の松が枯れた時、例の曾呂利新左が「御秘藏の常世の松は枯れにけり己が齡を君にゆづりて」と詠み、縁起を直し祝うたといふ

ので、何なりと賞を望めといはれ、碁盤の目毎に米粒を倍にしてならべて賜はれと願うたさうである。米粒を倍にしてならべる位何でもないと思つて許した所、盤面半にも至らぬに數十石に達したいふ事であつた。全く生物の増加は其の如くであるから、食料上から考へたらば、實に恐るべき問題であらう。

然るに右の人口に對し現在の耕地は約五百九十萬(或は八十萬)町歩ださうであるが、之から穫る産米は大正六年の第二回豫想が五千四百九十五萬餘石であつたから、大概五千四百五十萬石と見て誤りなからう。其需用は一ヶ年約五千五六百萬石ださうであるから、今の處では非常な豊作でないといふ事は明かである。大正二、三、四の三年間の調査によれば、約三十萬町歩の土地に産すべき食物が不足したさうである。併し是れは生産すべき土地がないのではなくて、人口が増加してゐるのに、農業者が比較的增加しないためである。換言すれば、農家に生れた子弟が、農業を嫌うて、都會生活に變じた結果である。専門家の調査に依れば現在尙開墾見込の耕地は二百八十九萬町歩はあるといふことである。これが全部開墾せらるれば、人口がまだざつと二倍になつても、さう驚かなくてもよいといふわけである。

茲に於いてか、切に望むは、都鄙を通して一般青年諸子が、此自衛自給の自覺をして欲しいのである。取り分け農村の青年諸子には衷心から囑望するのである。希くは決して都會熱に迷はず、熱心に農業に従事して、益々改良進歩を圖り、國家の將來に於ける、自衛自給の基礎を確立してもらひたいのである。又都會の青年諸子は、商工業も、勿論自衛自給上必要の事業であるから決して忽諸に付すべきではないが、徒に都會の弊たる浮華輕薄の風を追はず、質實剛健の生活を求め、農村の青年と相俟つて、眞面目になつて、一生懸命になつて、孔夫子の所謂「發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至」といふ意氣を以て活動せられ

んことを望むのである。走る犬は、睡れる獅子に勝るのである。働く農夫は、坐食する紳士より尊いのである。是れ聽て健全なる國民、善良なる公民といふべきもので、熾烈なる國家的觀念の由つて存する所である。斯くてこそ眞に徹底せる國體觀念、徹底せる忠孝觀念の顯現といふべきなれ。是れ併しながら、繰り返しいへる如く、其根柢は敬神の至誠にあることを忘れてはならぬ。諸子が準備の目標、修養の意義も亦此に存するのである。ところで今日は誰も彼も一口に國家的觀念といふけれども、其國家的觀念も右述ぶるが如き根柢あるものでなければ本當のものでない。随分怪しいものもあるのであります。

第一〇章 國家的觀念の内容

第四五節 國家本位と自己本位

國家的觀念といふ以上は、其内容等は詮議するまでもなく、國家の基礎を強固にし、國運の發展を圖りたといふ、國民の熱烈なる愛國心をいふのであることは、極めて明かでないかと、世人の多くは思はるゝであらうが、實は然うでない。成程單に其表面より觀れば、夫れに相違ないが、其觀念の因つて來る所に非常なる差があるのである。前に謝恩に、國家本位の謝恩と自己本位の謝恩とある事を述べておきました。が、其如くに、國家的觀念にも、國家本位と、自己本位との區別があるのである。前章の終りに斷つたのは此事である。

自己本位 自己本位の國家的觀念といふのは、一寸聞くと甚だ可笑しい様であるが、實はをかしくないので、自己の生命財産の安全を希望する爲に、或は自己の利益を圖る爲に、國家の基礎の強固なるを希ひ、國運の發展を望むので、換言すれば國家の基礎が薄弱であれば、自己の生命財産が危くなり、國運が振はざれば、自己が利益を得る機會がないといふところから、何處までも自己を主とし、自己を利する爲の一の手段としての國家的觀念で、其實は眞に國家を憂ふといふ誠意は少しもないのである。斯ういふ自己本位より來れる國家的觀念は非常に危険で、將來國家を亡すものは、敵の軍艦でもなく、敵の火砲でもない、實に此自己本位の國民なのである。

一朝外國と事を構へたと假定せよ、最初の中は國民擧つて、大に當局者及外征の軍人等に聲援を與ふるけれども、萬一愈々勝算がないとなると、打つて變つて反對に當局者を攻撃し、軍人を排斥し、國家の滅亡など打捨て、只管自己の安全と利益とを圖らんとするから、茲に内亂が起り、結局敵の乗する所となつて、國家を亡すか、然らざるも再び起つ能はざる致命傷を受くるといふが落ちとなるので、恐るべきは自己本位より來る國家的觀念である。俗語に「藝者の心と雪駄の裏は」何とかいふ歌があるが、之は單に花柳の歌妓の心事を喩うた計りでなく、真に陋劣極まる自己本位の國民の心情をもよく穿つて居るものと思ふ。大なる天下國家は暫く措き、小なる一郷一村の部落に於ても同じことで、町村に於て何か施設畫策せんとして、事を村民に謀ると、村民は先づ自己の利害を考へてから賛否を決するといふ風で、甚しきは一旦賛成しても、其事業が自己に利益がないと見れば直に食言して敢て耻とせず、尙甚しきは、不賛成を表しながら、其事業の結果が自己に利益あると見れば、恰も發頭人たるが如き顔をして、利益の分配を要求して憚らぬものもあり、或は一村の經濟も顧みず徒らに部落感情を固執する頑迷不靈のものもある。此處に面白い例證がある。是れは井上圓丁氏が、十年程前に實地を視て來ての話ださうで、大正五年の秋頃某新聞に書いてあつた事であるが、如何にも部落感情の弊害を語る好例であると思ふ。其話によれば、其縣の某村に苦情川といふ川がある。是れは新に開鑿した川に名をつけるに方り、各部落毎に、自分の部落に因める名を付けんといふ、詰らぬ争ひから苦情絶えぬので、何時とはなしに誰言ふとなく苦情川と呼ぶに至り、其儘河川の名となつたのだといふ。又關東の某地方に土睦村といふあり、十一個の部落より成つたので、十一部落のものが親睦するといふ意味で、十一を土といふ字にして、土睦としたのださうだが、其實一向

親睦しないとの事である。又畿内地方に天白村といふ村がある。是れも新村名をつけるに方り、數日徹夜して議せしも決せず、屢々天明に達せるより誰れ言ふとなく、天白村と呼ぶに至りたる由。又同じく關東の某縣某村に地震演習で有名な學校があつたさうだ。其れは舊二村が一村になつたので、學校を一つに併合して、新築仕様としたけれども、兩部落の衝突で、今以て(其當時の事)議纏らず、依然舊校舍に生徒を收容してゐるのだが、小學校令が始めて布かれた頃の建築だから、破損腐朽して居て、極く微少の地震にも第一に倒れる虞があるので、流石は校長だ、陛下の臣民たる可憐の少年少女を殺しては濟まぬといふので、毎日一回づゝ避難の稽古をしてゐるのださうである。其他同畿内地方に村の中央といふので、海拔何千尺とかいふ山の絶頂に、學校を建てた村があつたさうである。又關西の某村では、十年間に二回村役場を移轉することになつてゐたといふことである。(井上氏は縣郡村名まで話されてゐるけれども、今は態々之を略す)部落感情の弊も、茲に至つて極まるといふべきである。併し之は十年前の話、今日尙さうだといふのではない。是れ自己本位の思想が高潮して縣、郡、村の區別が解からず、只自己の住居する一小部分の利害のみ打算してゐるからである。史記商鞅傳に「民不可與慮始、而可與樂成」といふ語がある、支那人の愚にして且つ利己主義なる實際を穿つた語であらうと思ふ。即ち愚民には何か計畫しても、目前自己に利益のない事は必ず反對妨害するものであるから、事業を爲すの始めを議つては駄目だ、只出來上つてから始めて其便利なるを知るものだといふ意味をいうたのであらう。随分人を馬鹿にした話である。處が今日は斯の如き愚にして且つ自己一點張りの者が我國にもないでもない。歌妓が客に愛を致す振りをして、金に愛を致すは憎むべき様ではあるけれども、高が賤業婦の事である計りでなく、一面には又大に同情すべき點がないでもない。支那人の事は吾等の關知す

る所でないが、堂々たる日東帝國の國民、彌榮えま^{ミツサキ}す皇御國の臣民、天下の模範たるべき町村の公民にして、若し此の如き者あるとせば、眞に忌々しき事である。是れ國家の體面を汚すもの、否國家を亡すものである。

國家本位 國家本位より來るものは決して然うでない、假令自己は財産は愚か、一族郎黨を擧げて犠牲となるも、苟も呼吸の通ふ限り、意識のあらん限りは、困難辛酸を忍び、惡戰苦闘を續け、倒れて後止むといふ事があるけれども、實は斃れて尙止まず、魂魄此土に留つて國家を鎮護し、或は七度生れ更りて皇城を守るといふ、所謂純忠至孝鬼神を泣かしむる底のものである。純忠至孝即國家的觀念である。此觀念は一郷一村の部落に於ても同じ事である。而して此觀念は敬神の至誠より胚胎するものたること、屢々説いた通りである。

斯く比較して見ると、苟も國家を成すからには、國家を本位とする眞の國家的觀念を希望せざる國家はないであらう。處が、これが仲々偶然に得られるものでなく、僥倖に出來るものでない。金力で作らるべきものでなく、權威で取らるべきものでない。我國の如き、本支一元、君臣一體、義は君臣にして情は父子なる國體を有する國家にして、而して敬神の至誠ある國民に於いて始めて望むべきである。

我は國家彼は自己 吾等日本國民が神代の昔より、皇室を中心とし、忠孝の至誠を捧げ以て我神の創造し給へる此國家、我皇の統治し給ふ此國家を扶翼保護し來れる光輝ある歴史は、實に前章に述べたる惟神の自然の流露の跡であること何人も疑はぬので、之れを是れ眞の國家的觀念といふのである。

外國の様に、本支分流、君臣區々、義は君臣にして、情は怨敵的の國家に在つては、眞の國家的觀念は斷

じて望み得べきではない。若しあるとせば、前述の如く自己本位より來れるものか、然らざれば、統治者に強ひられて、心ならずも國家を愛する如き振りをする、付け元氣か、然らざれば虛榮心から來たものである。といふて何も其れが悪いといふのではない。只我と根本が違ふといふのである。

日露戰爭が其實例 日露戰爭の時、露軍司令官であつた黒鳩將軍が、戰役後に書れた「回想録」といふ書に斯ういふ事が書いてある。曰く「露軍の敗れたるは、吾等軍人固より其責あり、然れども國民の軍人に同情なきも其因なり、故に國民も其責の半を負ふべきなり」と。又曰く「開戦に先立ちて物質は日本に勝れるを知りたるも、日本には日本魂ある事を忘れたり、これ大なる敗因なり」といはれてある。如何にも能く兩者の國民性を説明してゐるではないか。併し其次に「日本の日本魂は日露戰爭を絶頂として今は段々下り坂に在る」といふ意味が書いてあつた。これは大に誠とすべき事で、實際其後に於ける我精神界は現在今日尙益々憂慮すべき現象にある事は前に述べた通りで争はれぬ事實である。夫れは兎に角、日露戰爭の開始せらるゝや、露國々民は、大に國家的觀念を發揮して、當局者及軍人を援け、首尾よく日本を叩き付け、滿洲を事實に占領し、其上日本の半分位を奪取し、澤山の償金を頂戴し、以て各自の懷を肥さんと期待したのであつたらうが、事志と違ひ、敗報頻に至り、結局勝算の見込が付かなくなつた處が、今度は自己の生命財産が危くなつて來たから、最初の氣勢何處へやら、反對に戰は軍人のするので吾等の關する所にあらずとして、管に聲援せざるのみならず、却て之を攻撃し、掣肘を加へ、遂に彼の様なる全敗となつたのである。氣の毒なるは黒鳩將軍である。將軍は開戦前に日本に來り、親しく我軍事的設備と、士氣の旺盛とを察したのであるから、當時頻に開戦尙早を主張したさうであるけれども、輿論の大勢如何とも

する能はず、開戦の止むなきに至り、加ふるに身軍籍にあるの故を以て、遂に司令官として出征したのである。然るに案の如く豫定の退却のみにして、遂に豫定の勝利を見ざる中に、國民からは攻撃せられ、皇帝からは叱責せらるゝといふわけ、司令官の榮職をもリネウイチに譲るの止むなきに至つたのである。當時將軍の心事は如何であつたであらう、實に同情に堪へぬのである。只將軍の爲に惜むは、何故に我大楠公に倣ひ、花々しく戦死して忠節を全うせざるか、然らざれば何故に丁汝昌の如く自及して其責を負はざるかといふことである。夫れは扱措き、是れが實に能く自己本位から來た觀念の危険を證明する好證本である。

之は獨り露國計りでない、外國は何れも皆然うであるけれども、併し同じ自己本位でも、教育あるもの、自己本位は道理ある自己本位で、決して國家を危くする様子の事はない。英國の如き先づ其部であらうか。露西亞の國民は無教育の自己本位だから實に手が付けられぬ。愧も、外聞も、體面もないのだ。今度の動亂が動機となつて革命を惹起し、今に騷擾が絶えぬのも、全く上下通じて無鐵砲の自己本位が、原因してゐるのである。國民の無教育なるは全く驚くべきもので、此動亂の初頃モスコの在十里許りの村の小學校の校長が生徒に戦争の話をすると、露國は今佛國と戦うてゐるのだと聽かしてゐたといふことである。以て其全般が知られる。支那もさうであるが、大體に於て國民の知識が平均してゐないやうである。昔から非常に拔群の學者、思想家、音楽家等は兩國共に随分あるが、一般は實に無智無學で、日清日露戦争の時、日本の兵士は勿論人夫迄が、文字を知つてゐるのに、支那人は驚いてゐたといふが如きは、之を證明してゐるのである。だから支那では昔から少し偉い人が出て、何か人民の利益になるやうの事を開かして旗を舉

げると、悉く之に風靡して仕舞ふのである。支那には随分思ひ切つて事實に遠い形容詞があるけれども、此風靡といふ形容詞だけは、全く事實で、事が國家社會に利益であらうが、不利益であらうが、そんなことに構はず自己にさへ利益だと見てからは、實に風に草の靡く如く、随從するのである。露國も其の通りで、全く似てゐるのであります。

第四六節 獨逸の國家的觀念

ヘーゲルの道德觀念 獨逸の哲學者ヘーゲルといふ人が斯ういふ事をいうてある。國家を離れたる個人の人格は燈の火に等し」と。又曰く「今の時代は國家的時代なれば、國家的觀念の上より成立する道德にあらざれば、最高至善となすに足らず」と。これは我國の如き、最高至善の國體より成れる國家にして、始めて適用すべき、否實現すべき理想にして、外國の如き篡奪的、侵略的、不善不義の國體より成れる國家の言ふべき理想でない。此ヘーゲルの言に對し、陸軍少將野澤悌吾氏は「ヘーゲルの此の言は、普通の國家に在つて通用し得ざるの憾あり。何となれば今日普通の國家は、我慾的國家にして、國家其物が已に最高至善ならざればなり云々」といはれましたが、至極尤もな事である。が併し退いて考へて見ると、これには少しく理由がある様に思はれるのである。夫れは既に述べた如く、外國の國民は自己本位が本領であり、本性であるけれども、近世に至り世界の氣勢は、獨逸計りでなく、總ての國がヘーゲルの言ふ如く、國家的觀念の上より成立する道德を中心としなければ、國家が存立して行かないといふことを自覺して來たのであらうと思ふ。佛國の如きも遅蒔ながら、今回の戦争に依つて教育の方針を一變し、國民性を改善し、愛

國心の養成に努力してゐるといふ事である(緒論参照)。只此自覺が獨逸に比し、一世紀後れたるを遺憾とするのである。ヘーゲルは一七七〇年に生れ、一八三一年に歿した人であるが、一八一八年以來、有名なフイヒテの後を襲うて伯林大學の教授となつた人である。フイヒテが伯林大學總長たりし當時の普魯西亞は、どういふ状態であつたかに思ひ至れば、ヘーゲルの此言をなす、決して偶然でないといふことが判るのである。即ち一八〇六年那翁一世の爲に殆ど普魯西亞は全滅せんとしたのである(委しくは前著七七頁参照)。當時フイヒテは、此敗因を國民元氣の消沈と個人主義の弊とにあることを喝破し、奮然起つて「獨逸國民に告ぐ」といふ大演説をして、國民の覺醒を促し、一方時の宰相スタイン(スタインは我樂翁公に比す、べき名宰相であつたといふ)と協力して、國家本位、即ち獨逸主義の教育を強制的に命令して、大に國民に國家的觀念を鼓吹したのである。青年團等の物興も實に此時である。緒論に述べてあるが、國王フリードリヒ、ウイルヘルムは、「國家は物質に於て損失せる所を、精神に依りて恢復せざるべからず」との詔勅を下して、國民を激勵し、宗教の宣教師まで政府之を任命して、國家的觀念を宣教せしむる等、實に全力を傾注したのである。詩人アルトンは、慷慨悲憤の詩を賦して、同じく青年の元氣を鼓舞したのである。曰く「(前略)神は地球に鐵を産せしめたるなり鐵を以て吾人は武器を作り而して我を威壓せんとする襲撃に邀ふべし」と、是れ青年の血を湧かしめ、肉を跳らしたのである。ヘーゲルは、此時代に於て而も熱烈なるフイヒテの後を襲うた人であるから、彼が彼の言を爲すは決して偶然ではなく、實際の必要に迫られて、思はず發せる叫びであらうと思ふ。否ヘーゲルの叫びでなく、獨逸上下の叫びであつたらうと思ふのである。斯の如く國王始め當路の人々の熱誠は根本的に國民に自覺を與へ、教育の主義も稍理想の如く改善せられ、茲に愛國的尙武思想

上下の間に磅礴として起り因て以て今日の發展を見るに至つたのであらう。今次の動亂に際し、今に(大正六年)秋頃)頑強自ら持する所以のものは、聯合軍の振はざる爲にもよるならんかなれども、要するに之が爲であらうと思ふ(緒論参照)。

天工と人工 吾等日本國民の國家的觀念を天工に出でたるものとせば、獨逸國民の國家的觀念は人工に出でたるものといふべきである。人工に出でたる國家的觀念でさへ斯の如き熾烈を爲すのであるとすれば、天工に出でたる我國家的觀念は、其熾烈の度に於て何ものも及ぶものなきは當然の事である。否然うなくてはならぬのである。が併し翻つて案するに、現在に於ける獨逸國民の國家的觀念は、右の如く、熾烈は即ち熾烈であるが、元來が人工に出でたので、惡くいへば政府より強ひられたる付け元氣であつて、吾等日本國民の様に、天工的自發のものとは異なるのであるから、萬一政府の緊張したる號令が弛緩するか、或は敗戦復敗戦、愈々勝算がないといふ事が判然し、自己の生命財産が危くなるといふことになつたらば、事によると元の自己本位の本性を現し、動搖を醸すではあるまいか。

夫れは兎に角翻つて我國の現在はどうであらうか、果して能く天工的の國家的觀念が、昔日の如く熾烈なるものであらうか。特殊の國民性たる純忠至孝は、昔日の如く鬼神を泣かしむるものあるであらうか。其根本である敬神の至誠は、昔日の如く國民舉つて所持してゐるであらうか。敬神の至誠は吾等日本國民の産れながらの良風美俗即ち自然の性情であることは已に説明した通りである。されば敬神の至誠を缺くは即ち自然を破壊するもので、自然を破壊するものは忠孝を破壊するものである。忠孝を破壊するものは國家的觀念を破壊するもので、國家的觀念を破壊するものは即ち國家を破壊するものである。吾等國民中に、

此の如きもの一人もなからんことを、衷心より禱るものである。否一人もあらざることを信じて疑はぬものであります。

第一章 敬神と婦人

第四七節 家庭教育

第七章第二九節に於いて、我國に近年著しく少年の犯罪者が増加して來たといふを説いて其事實を挙げ、而して是れ一般社會に敬神思想の衰へた結果であるとし、其例證として父母に早く別れたる少年に、比較的不良者が多いといふを述べておいた。是れ家庭教育が、少年少女に與へる感化の偉大なるものがあるといふを證したのである。果して然りとせば、世に人の親たるもの深く考慮しなければならぬではないか。

徹底せる教育 世人動もすれば教育としいへば、單に學校教育のみが教育である如く考ふるものがあるけれども、是れ大なる誤りである。學校に於て、如何に周到なる教育を施し、如何に完全なる指導を爲すといへども、家庭に於いて學校と相俟つて、能く學校の精神を體し、主義を諒して、之を迎ふるでなければ、何等の功を奏しないのである。勿論今日の學校教育は、畏くも 勅語の精神を奉體し、德育、知育、體育の三大綱に従ひて完全なる教育の實行を期してゐるのであるから、家庭に於て餘計な世話を焼く必要なきやうではあるけれど、如何せん、限りある時間と、限ある教師を以て、限なき徳義の涵養、限りなき知識の啓發、限りなき體格の發達を實現するといふは、事實容易の業でない。勢ひ何れかに輕重精粗の差を生ずるの止むを得ざるに至るのである。今日總ての學校に於て、多く知育に偏し、體育之れに次ぎ、其最も大切なる根本精神の德育を輕んずるの傾きある所以のものは、德育を輕視するのではないが、知育、體育に忙殺せ

らるゝからで、決して教育の制度が悪いのでもなく、教師其人が悪いのでもない。實に餘儀なき自然の成行である。去れば其徳育は寧ろ家庭に於いて之が教育の責に任じなければならぬと思ふ。否、任すべきが當然であらうと思ふ。即ち學校と家庭と兩々相俟つて、相應じ相對し、所謂前より引き後より押して、始めて眞に徹底せる教育が出来るのである。國運の發展も人格の向上も、此徹底せる教育に俟たなければならぬは、今更言ふまでもない。普佛戦争の時、普軍の參謀總長たるモルトケ將軍は「今度獨逸が佛蘭西に勝つたのは、軍人でもなく、兵器でもなく、勿論戰術でもない、獨逸の教育が佛蘭西の教育に勝つたのである」といはれたさうだが、實に至言だと思ふ。正しく其通りで、教育が如何に國家の發展に大なる關係を有するものであるか判るではないか。然り而して教育の根本精神たる徳育とは所謂道德教育であるが、道德は國に依つて標準が違ふもので、獨逸には獨逸の道德がある。即ち其國の精神に副ふのが其國の最高の道德である。我國の道德は言ふまでもなく純忠至孝である。別言すれば、前にも再三述べた通り何事も皇室を中心とし國家を本位としたるものが、道德の本義である。故に忠孝を缺いた教育は、單に物識(第七章第二九參照)、理窟屋を造るのみで、却て國家社會を害する虞れがあるのである。勿論學問即ち知識がなければ、大義名分は扱措き、總ての物の道理が判らぬから、決して學問を等閑にしてはならぬが、但徹頭徹尾忠孝の精神が離れてはならぬのである。忠孝の精神の抜けた學者(物識)と、文字のない頑迷不靈の沒常識漢とは兩極端であつて、而も其歸趣が一つになることがある。即ち斯ういふ事實がある。一は高等學府の學生が親に孝行するといふ理由が解らんとつて校長に質問したといふ驚くべき事實である(前著八五頁參照)。一は慶長年間仙臺藩の加美郡の山中に親を殺して平氣でゐた若者があり、官に捕はれて糺されても、自分の

親を自分が殺したので他人に迷惑をかけたのでないから、罪せらるゝ理由がないというて、服罪しないので三年獄に繋いで讀書をさせ、忠孝の大義を教へた所、漸く其大罪たることを悟り、潔く法に服したといふ話がある。事實が奇怪であるばかりでなく三百餘年前の鎖國時代の出來事と、大正文明の今日の出來事と契合するといふのが面白いではないか。而も前者は學者、後者は無學者と來てゐるから一段と珍である。併し後者は無教育であるからあきらめも出來るが、前者のやうに折角金をかけて教育してやつて右の如き、大不忠大不孝の子となられては、親たるものも、教師たるものも、此上なき心外千萬であらうと思ふ。乃ち知育に傾く學校教育のみに委しておかれぬ。其精神の陶冶は、寧ろ家庭教育に俟たなければならぬこと明ではないか。

僞らざる告白 抑々人の親たるものゝ最も僞らざる告白は、吾子の前途の幸福を祈る事であらう。敢て積極的に披群の出世を願はざるまでも、責めては消極的に惡人とならぬだけにと祈るのである。萬一不忠不孝不義の子となるあらんか、親は其身が水火の呵責を受くるよりも猶苦痛を感ずるのである。こゝに最も適切な實例がある。明治三十一年九月長野縣小縣郡某村の柳澤源平(六九)といふ老父が倅八十七の放蕩懶惰を苦しめ、責めて親が懲役になつたと聞いたならば改心することもあらうとて、老の涙を噉りつゝ警察署へ出頭して、懲役に處せられん事を願うたといふ事が、新聞に書いてあつた。何と憐れな話ではないか。又大正五年十二月には、一層悲惨の事實が報道せられた。其れは埼玉縣北足立郡片柳村荒井信一(二六)といふ者、十三才の時から、日本橋の廻糸間屋鈴木安兵衛方に雇れ居る中に放蕩を覺え、主家の金千三百圓を遣ひ込み逃亡したのである。父太吉大に驚き、四苦八苦して五百圓の金を工面して主家に辨濟し

たるも、尙申譯がないとて同家へ遺言状を送り、割腹して果てたのである。信一は法庭に於いて裁判長より父の自殺を聞かせられて驚き、始めて放蕩の夢醒め悔恨の涙一時に込み上げ、其場に昏倒して、人事不省になつたといふ事が同じく新聞に書いてあつた。何たる痛恨事であらう。人世の悲劇も、茲に至つて極まるといふべしである。

以上の二つの事實は、必しも家庭に於ける教育が届かざる結果であるといふのではない。親としての心情は斯くまでのものであるといふ一端を例證したのである。世間には随分立派な家庭に育てられたものでも、不良の人となることもあるのであるから、決して一概に言ふことは出来ない。醫師の家からも赤痢患者が出、下戸の息子に狸々の如き上戸が出来ることがあると同じである。併し之を古今に照し、之を實際に徴し、之を統計に見る等各方面から観察して、家庭教育の如何が、子女の性格に大なる感化を與へることは争はれぬ事實である。

家庭の女王 此觀察を誤りなしとして、然らば家庭に於いて、子女教育の任に當るものは誰であらう。主人たる男子は、大は天下國家の用務から、小は一身一家の經營の爲、奔走日も尙足らぬのであるから、子女教育に對しては主義方針は固より示すも、之が實行までも監督指導するの餘裕がない。是れはどうしても主婦其人の役目である。否天職である。又婦人の性格からも適當であるのみならず、古から東西を通じて然うなつてゐる。現に西洋では「婦人は家庭の女王にして、愛は法律なり」とまでいうてゐる。佛國の詩人ユーゴー（一八〇二年生）が「女は弱いけれども、母は強い」というたのも、母の子女を教育するの權威をいうたのであらう。乃ち主婦たるもの、一舉手一投足、一言一句は悉く是れ子女を感化する

の資となるのである。

抑々人間は、日耳曼の生物學者ワイズマンのいへる如く、模倣の性質を持つてゐるものである（總ての動物、だから常に其昵近してゐるもの、特に崇拜してゐるもの、總てを眞似習はんとしてゐるものである。子供に於て特にさうである。門前の小僧習はぬ經を讀み、孟母三遷の教へは正しく其性質を證明したものである。三つ兒の魂百まで、幼少の時の印象は終生消えぬものであると同時に、幼少の時の善惡毛厘の差は遂に千里の違ひとなるのである。嗚呼主婦たる勤めも亦仲々難い哉である。）

眞に子女を愛せよ 夫れ然り、果して然らば主婦は如何にして其役目を盡し、責任を果し、天職を全うせんとするか。子女に最も大切なるは、前章青年團の條に述べた如く、敬虔恭順即ち「畏み」の觀念の涵養である。此觀念は敬神の至誠に基くものであること已にいうた通りである。されば主婦たるものは、不識不知の間に、子女を誘導啓發して、敬神の實を舉げしむるの方法を講ずることが肝要である。然らば其方法はどうするかといふに、何も六ヶしいことはない。主婦自身が、衷心から敬神の實を擧ぐれば宜いのである。單に子女教育の爲に、うはべの敬神を装ふのでは駄目である。一生懸命に、眞面目に、眞から底から、命がけの敬神でなければならぬ。尤も眞に、子女の前途を案じ、將來を思ふならば、必ず熱誠なる敬神の實が現はれる筈である。佛國のリヨンといふ處では手のない人に義手を、足のない人に義足を、造らせてゐるさうである。是れ我身に比べて見て、手足のない人に對して、眞の同情深切があるからである。この理由からして、主婦たるものが、熱誠なる敬神の實が現はれないとすれば、それは眞に子女を愛するのではなく、所謂繼母根性であるといふことを告白するものである。然るに今日の實際はどうであらう。

茲に多くを言ふを欲しない。只希くは世の主婦たるもの、現在に於ける少年少女の風潮に鑑みて一考を煩
したいのである。

以上は家庭の主婦即ち人の母に關しての大要を述べたのであるが、更に一般女性の敬神に就いて一言を費
すの要があると思ひます。

第四八節 誠忠貞節

神明奉仕 抑々我國民の特殊の國民性たる純忠至孝は、敬神の至誠に淵源したものであることは、前各章
述ぶる所の如くであるが、其國民中の一半は女性であることを忘れてはならぬ。換言すれば、純忠至孝
は、獨り男子の専有でないといふのである。敬神の至誠は、獨り男子にのみ存するものでないといふの
である。否敬神に關しては、男子よりも一段密接であつたではないか。少くも神明に奉仕するは、女子の
先天的適任であつたではあるまいか。先づ第一岩戸の段に於ても天宇受賣命は大立者であつたのである。
彼時、天兒屋命、天布刀玉命、思金神たちの劃策如何に宜きを得ても、命の至誠以て神樂を奏するなかつ
たならば、天日を再び拜することが、或は出来なかつたかも知れぬのである。降つて人皇に至つては、
大御神の御杖代として、御世毎に皇女を卜定して親しく神宮に奉仕せしめ、之を齋宮と申して、神宮奉仕
の最高の官職と定められたのである。齋宮とは「イッキノミヤ」又は「サイグウ」と稱し、卜定の上三年間齋
戒の後、任に就かせらるゝのである。即ち崇神天皇の皇女豐鋤入姫に創まり、後醍醐天皇の皇女祥子内親
王まで千四百餘年の久しき間續いたのである。其後は世態の變遷の爲に、此制度は廢絶したけれども、以

て如何に女性が、常に家庭の主婦としての職責上からばかりでなく、神明に奉仕するのが先天的適任者で
あつたかといふことが判るのである。即ち最も能く神明の御意に適つて、寵愛せられしものであることが
想像されるのである。

誠忠男子に譲らず 隨つて純忠至孝の實蹟も、亦決して男子に譲つてゐないのである。現に右の天宇受賣
命が、天孫降臨の時に於ける誠忠と活躍とは、之を證して餘りあるのである。即ち書紀の一書及古史成文
などの誌す所によれば、天の八衢に天孫の一行を奉迎した猿田毘古大神は「鼻長七咫、背長七尺餘、上
光天原下光葦原中國、眼如八咫鏡」とあるから、其英姿勇風將に三軍を睥睨せんとするの概があつ
たに相違ないと思ふ。當時大神の意志が善であるか、惡であるか、將た順か逆かが判らぬので、諸神は何れ
も躊躇逡巡、敢て詰問に向ふ者（古書に「不得目」がなかつた）がなかつた（これは理由あることではない）。乃ち天孫は命に實地偵察
審問の役を命じたのである。手弱き女性の身を以て、只一人奮然身を挺して其衝に當らむとする、命の心
中や如何、感慨や如何。幸に大神は無二の誠忠を捧ぐる意志で、自ら奉迎し、進んで嚮導たらんといふの
であつたから、命は常に使命を全うしたのみならず、之が因縁となつて仇讐永久に結ばれたのであるが、
若し此時大神に惡意逆心があつたとしたならば、命は如何に勇なりとも、一撃の下に殺されたに相違ない。
思ふに命は、初めより討死を覺悟してゐたのであらう。即ち女ながらも天孫の爲に、一命を捧ぐる決心
をしたのであらう。何ぞ其心根の誠忠にして、而も優美なるや。想ひやるだに涙に咽ぶのである。壽永
（三年二月二十八日）の昔、檀浦に於いて那須與一宗高が、二十ばかりの若年を以て、主君義經の命により馬を波間
に乗り入れて、平家の軍扇を射落さんとする時と同じである。此時與一は萬一射損じたならば、其場を去

らす自害する決心であつた。平家物語は其刹那のことを語つて曰く「與一目をふさいで南無八幡大菩薩、別しては我國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆせん大明神、願くはあの扇のまん中射させてたばせ給へ。これを射損するものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向ふべからず云々」と默禱したのである。何たる勇ましいことであらう、何たる憐なことであらう。相州北條の幕下佐野の城主天徳寺は琵琶法師をして佐々木四郎と那須與一の曲を語らしめ、感慨無量、全曲を聴くに忍びないで中止せしめたとは人口に膾炙してゐる話であるが、物の憐を知る武夫としては然もあらう。而も命は、其事が天業恢弘の大切な場合なると、其身が女性なるだけに、一層壯烈悲痛の感を深うするのである。此一事を以ても我國女性の天稟的特性の因つて存する所が判るのである。而も宇受賣命は以上の如く犠牲的誠忠を捧げたばかりでなく、柔順貞淑なる女徳も亦決して缺いてゐない。世にお多福と稱する面あり、鼻頗る低くして、額、頬、頤等の凸出したものである。是れ宇受賣命の柔順なる女徳を表はしたもので、額、頬、頤を祖先、父母、良人、弟妹とし、總て此等の尊族卑族に對しても常に鼻の低きが如く辭讓するといふ意を示したものであるといふ。斯ういふ傳説が俗間に傳播してゐるに見ても其性格の一端が知らるゝのである。即ち君父良人は勿論子女の爲には何時も常に一番先に犠牲になるといふ美しい意味である。内に此の如き柔順貞淑の婦徳あるを以て、外に犠牲的誠忠が現はれるのである。

忠貞天地を貫く 日本武尊が東征に方り、相摸沖に於いて暴風に逢はせ給ひ、全軍覆没せんとした時妃弟橘媛が「是れ海神の祟なり、妾自身を以て之に當らん」と宣ひて海に投じ給へるが如き、全く其犠牲的精神の實現である。雄略天皇の御宇、引田部赤猪子が天皇の詔命を畏みて八十年間、其節操を守りたるが如き

も、女性としては實に大なる犠牲である。天皇嘗て汝は朕が喚すから、他に嫁ぐなと詔らせ給ひたるを堅く守り、天皇は已に忘れ給うて入らせられるに、敢て其旨を申出るでもなく、堅忍八十年、只管大命の下るを待つてゐたのである。然るに容姿既に耆いて更に恃む所なきに至り、始めて其心情を奏上したのである。是れは逆も尋常普通の女性の能ふ所ではない。況や今日の新しい女などの夢にも出来ることでない。八十年間遣る瀬なき情を抑へて堪へ忍べるは、死に勝る犠牲である。而も古書に「其容姿甚麗」とあるに於いて一入痛恨に思ふのである。又時代は遠く離れるけれども、武田勝頼が天目山で戦歿する時、其室北條氏を小田原に送り返さんとせしに、北條氏斷として従はず「黒髪の亂れたる世ぞはてしなき思ひに消ゆる露の玉の緒」(里方小田原へ)との辭世を遺し、二十三才を一期として良人勝頼に殉じたるが如き、或は戦國時代の花形として大坂城の末路を飾りたる、木村長門守の室眞野氏が、妙齡花の如き身を以て、良人重成が討死の決心せるを知るや、良人の決心を強め、最後を潔うせしめんとて、出陣の前夜、水莖の跡も鮮かに鴛鴦の契り濃なりし既往を叙して、從容自刃したるが如き。共に其心の裡の床しさ、香しさ、馥郁として今なほ薫るが如く感ずるではないか。其他古來我國の女性が、貴賤高下の別なく、母として、妻として、或は處女として、間接に男子を助くるあり、直接其衝に當るあつて、純忠至孝、柔順貞淑の徳を紙上に遺し歴史を美化してゐる事實は、數へ來れば日も尙足らぬのである。畢竟是れ我國女性の先天的美徳の流露である。右の如く美徳を備へてゐたのであるから、昔は女性を敢て男子より偉いものとして尊敬したわけではあるまいが、決して侮蔑はしてない。即ち極端なる男尊女卑などいふ風はなかつたのである。尤も國家の制度の上でも、男子と同様に納税の義務を負うてゐたのである。男子に弓弭ユハズの調、女子に手末タナメの調のあつたの

は其證である。要するに國民として、其天職を盡す上に於いて、甲乙はなかつたのであらう。甲乙ないといふのは、男子を凌駕し、輕蔑したといふのではない。右に述べた四女性の如く、良人の爲に自分を犠牲とし、良人をして名をなさしめ、家名を上げたといふの意である。所謂夫唱婦隨の原則は、決して紊さぬのであつた。是れが即ち我女性の思想であり、性格であり、否天職であるのであります。

第四九節 女性の人格聲望衰ふ

以上の如く我國では、古來女性を決して輕侮或は度外視してゐないのである。別言すれば女性も亦相當の識見と人格とを具備してゐたのである。然るに其女性の人格聲望が段々衰退し下落して、男子は勿論であるが、女性自身も悉くではないが、中には、女はふがひなきもの、弱きものと信じ、殆ど物品扱ひにされて怪まぬ者もある様になつたのである。是れには無論種々の理由も原由もあらうけれども、要するに支那及印度の風が移つたのであらう。即ち漢學並佛敎の影響であると思ふ。

漢學と女性 支那の女性は餘程其性格が悪かつたと見えて、隨分支那では、女性に壓迫を加へ、侮辱を與へてゐるやうである。例へば「女子小人難養」といふが如き、全く女性を厄介視したもので、侮辱も甚だしいではないか。或は「婦人從人者也」とか「婦人不專行必有從」などは、槌の河流れのやうに一生頭を出してはならぬといふので、壓迫の極であらう。或は「哲夫成城、哲婦傾國」などに至つては、驚くの外ない。即ち女性を大逆賊と見てゐるのである。我國で遊女を「傾城」と稱するは此句から出たのであらう。或は「婦人口大舌長、男子家敗身亡」といふなどは、此上もない虐待で、一生沈黙を守り、決して口を開くなどいふのであ

る。又韓退之は、三人道を行けば必ず我師あるというてあり、我國には三人寄れば文珠の智恵といふ諺さへあるに、可哀相に女といふ字、三字重ねて「詐也、淫也、私也」など註するに至つては情けない極である。我國でも普通、女三人寄れば「喧」といふので姦字を「喧」と俗に讀ませることもあるが、何時の頃よりのことか判らんけれども、今日では實によく其眞を穿つてゐる。即ち井戸端會議の三時間の姦しさは、全く堪らぬ。是れも支那風の感染であらうか。

一體支那では、女子を人間とは見てゐない様である。男子を家といひ、妻を室というて、家を相續するものは男子に限るのである。故に子といふものは男子に限るのである。子供が幾人あるかの間に對して、女子は幾人あつても數へず、男子のみを以て、幾人あると答へるのである。是れ女子は絶対に家を繼ぐ事が出来ないからである。子供に男子がなければ血統を同じうするもの、即ち同宗の男子を限り養子にするのである。夫れはどういふわけかといふに、支那の家には「昭、穆」の制があつて、相續は昭穆を異にしなければいけないのである。第一世を昭といひ、第二世を穆というて、父は昭、子は穆である。而して兄弟は昭、穆を同じうしてゐるから養子とはなられない。昭、穆は、宗廟配列の順次で、父は南面、子は北面に位置するのである。禮記に「夫祭有昭穆」といふのは其れである。そこで同宗中の男子にして昭、穆の同じからざるものを求めて養子とするのである。だから家付の嬢があつても、「同姓相婚せず」といふ制裁があるから、自家の養子と結婚することが出来ないのである。即ち絶対に女子には家督相續の權利がないのである。是れ女子は幾人あつても、子の數に數へられぬわけである。だから支那では、女子は全く品物扱ひにされて、賣買までされるのである。即ち結婚とは女子を買取るのである。「夫有再娶之義、婦無二適之文」といふは繼嗣を重んずる爲といふけれども、金で買ふ妻だからの事であらう。故に金なきものは

一生妻帯が出来せず、所謂「苦夫」(奴隷)を以て世を終るのである。聞く所によれば、或地方などでは女の子供或は年頃の女を籠に容れて、果物を賣る如うに行商するものさへあるといふ話である。尤も日本でも中國の某國の某村には、昔からの習慣で今でも下女の市が立つさうである(地名も判つて居るも懸念省く)。圓顔は幾何金、面長は幾何金、曰く高價い、曰く廉價いなど、談合するは蓋し世界の珍であらう。是れも支那風を真似たのかも知れん。夫れはさて措き以上列擧の事實を以て、支那に於ける女性觀の大體は知れると思ふ。要するに女性に對する制裁的訓言のあるは、其半面に惡思想惡性格のある事を證するものであると見てよからう。即ち思ふに支那の女性は我女性のやうな貞淑温良、純忠至孝の美德を缺いて居つたに相違ないと思ふ。素より例外はある。現に今日支那の中流以下に於ける夫婦者が、相携へて道を行くに方り、婦は杖をつきて先に立ち意氣揚々として蓮歩を運ぶに、良人は後より婦の荷物を負うて従ふので、全く護衛隨行の役を勤めてゐるのである。想ふに是れが本當の支那女性の性格であらう。更に支那通の人の話に聞けば、支那の女の纏足は、實は彼等の淫奔を防ぐ手段であるとの事である。或は事實であらう。蓋し淫亂姦淫は、彼等の忌憚なき赤裸々の性格ではあるまいか。我平安朝時代の女性が、我女性としては多少墮落の傾きがあつたのも、此の如き支那女性の思想性格の移つたのではあるまいか。以上の如く彼等は我儘にして淫奔極まるものであるから、一方に於いて極端なる壓迫、虐待を加へられたのであらう。

佛教と女性 佛教に至つては一層非道いので、全く女性を大惡魔、大罪人として蛇蝎の如くに見てゐるのである。佛教の經文に女性に關して如何なる事を説いてあるかを見れば、蓋し思ひ半に過ぐるであらう。例へば「諸有る三千世界の男子の煩惱を合せ集めて一女子の業障とす」「女人は大魔王なり能く一切の人を

食ふ、現世には纏縛をなし、後世には怨敵となる」(涅槃經)とか、或は「清風の色なきは猶捉るべし、虻蛇の毒を含める猶觸るべし、劍を執つて向へる敵には猶勝つべし、女人の人を害するは禁する事難し」(智度論)又「女人は地獄の使なり、永く佛の種子を斷つ、外面菩薩に似て内心は夜叉の如し」(唯識論)といへるが如きは、全く猛獸毒蛇よりも恐しいものとしてゐる。實に惡鬼羅刹の身に迫るが如き感があるではないか。或は「三世諸佛の眼は大蛇に落つるも、法界の諸々の女人永く成佛の期なし」(心地觀經)などは、情ない極みである。一たび女人を見れば、能く眼の功德を失ふ、たとへ大蛇を見るとも女人を見るべからず」(寶積經)に至つては物騒千萬。女學校の先生は皆眼病患者となるであらう。

以上は即ち佛教の女性觀である。此經文によつて印度の女性の恐るべき執着の惡思想、驚くべき邪見の惡性格なることが想像されるのである。要するに支那及印度の女性は、無智にして強情、無學にして執念深く、不明にして、お轉婆、馬鹿にして虛榮心が強いといふ、手も足もつけられぬ所から、教訓やら、制裁やら、壓迫やら、虐待やらを加へられたのであらうと思ふ。然るに女性といへば皆同一のものと思ひ、我高潔無垢、温良貞淑、純忠至孝なる女性にも、之を加へたのである。是れ抑々我女性の人格聲望を落した最大原因であらう。我國に於いて女性の範として準據すべき訓誡制裁等を書いたものが多々あるも、大概は、皆支那印度の燒直しであるというて不可なからう。そこで女性自身も亦、所謂習ひ性となつて、成程女性といふものは、然ういふものかと考へるやうになつたのではないか。さうして其考へが、代變り世移つて、幾星霜、幾年代の末に、何時とはなしに、悉くではないが、中には其思想性格までが、段々支那風印度風に化して、其無智の點、強情の點、嫉妬の點、執念の點、虛榮の點、お轉婆の點等が酷似して來

たのではあるまいか。比喻にとるは如何にも我女性を侮辱したやうに當り、且つ多少趣は違ふか知らぬけれども、何も知らぬ子供が盜賊の活動寫眞を觀、盜賊が最後には捕はれて鐵窓に苦むといふ、勸善懲惡の所を感じないで、盗みをやる巧妙な所を覺えて、其眞似をし、遂に本物になつたといふと同じではあるまいか。又戀愛の結果、遂に身を投げるといふ悲劇を觀て、却て劇中の戀愛者を眞似て見たいとの考へを起し、遂に墮落した少女があつたといふと同じではあるまいか。

西洋の女性 處で、西洋は昔から文明國だというて誇つてゐるけれども、女性の思想性格に至つては、矢張支那印度の女性と變らぬかと思はれる。或人の話に西洋に婦人心得草といふ書がある。夫れに

ゆめ／＼憤怒の言葉と行ひとを現はす勿れ、角立ちて苦々しき音聲を出す事勿れ、女子は己を制することゝに勉め柔和にして耐忍なるべきものなり。

といふ事が書いてあるといはれてあつた。斯ういふ誠があるを見れば、其一面に其反對の行爲があるに相違ないのである。尙又一段能く判るのは、西洋に於いて女性に關して加へてある批評或は諺ともいふものである。例へば「女が黙して居る時は、知らないことの時ばかり」(獨)、「狐は全身是れ尾、女子は全身是れ舌」(英)などの如きは、如何にもよく虚榮から來る物議の饒舌を忌憚なく罵倒したものであると思ふ。「女は髪の毛は長いが、思慮は短い」(獨)、「綺羅に富める女は頭腦が乏しい」(全)、「姑は嘗て己の娘たりしことを記憶せず」(英)などは、實に無智無學にして、淺慮淺見の愚を嘲つたものと思ふ。「女の怨恨永く盡くる事なし」(英)に至つては、蛇の如く執念深き、恐るべき根性を痛快に叩いてゐるではないか。若し夫れ「婦人に最も肝要なる性質は温和にあり」(佛)といへるが如きより想像すれば、平素如何に憤怒の言行をなし、

角立ちて苦々しき音聲を出して、男子を困らせてゐるかが判るではないか。又「惡しき妻は、夫を破舟の難に陥らす」(英)などは、如何にも良妻を要求するの切なる情が見えて、寧ろ同情に堪へないのである。以上は僅に其一例であるが以て其全般を卜知することが出來ると同時に、今日我國の女性にして、貞淑温良の美德を舊思想であるなど、思うてゐるものゝ愚なることも判るのである。結局支那も、印度も、西洋も、女性といふものは仕末に終へぬものと相場が定まつてゐるやうである。

新しい女性 然るに此間に介在して、純忠至孝、貞淑温良の美德を城壁として、割據せる我女性は、飽迄之を死守すべきなるに、豈圖らんや支那の聖人も、印度の菩薩も、見て以て悪いというて誨誥を與へてゐる、思想性格に感染し、今日は更に西洋人も不快とする、西洋女性の思想性格を眞似し、到頭、さしもある、堅固の城壁を外からは破られ、内からも壞して陥落の止むなきに至らしめたやうである。即ち固有の善美なる性格は變じて、所謂新しい女性といふものが生れたのである。前にも述べた如く、支那には、女の口が大にして舌が長ければ男子の家を破り身を亡すといひ、西洋では、悪い妻は夫を破舟の難に陥すといひ、佛教では、女人の人を害するは禁ずること難しというて歎いてゐるが、我國の今日の新しい女なるものは即ち其れである。先年天下を驚した海軍收賄事件も、近頃世人を騒した製鐵所事件も、共に受賄者の妻君の贅澤が原因をなしてゐるではないか。今日總ての犯罪事件は大小となく、其原因が大概女性に起つてゐないものは殆どない。一體女性には偉大なる感化力と潜勢力とがあるものであるが、之を悪用すると大變な事になるのである。今日の新しい女性は、正に之を悪用してゐるのである。昔の我女性も之を利用はしたけれども、今日の新しい女性の様な、不潔にして陋劣なる事はやつてゐない。堂々たる政治上とか、戰略

上とかに用ゐたのである。尤も夫れが爲に大戦争を惹起して、人民を苦しめた事もあるけれども、兎に角偉いものであつた。然るに今日の女性は、自己一身の榮華贅澤の爲に、良人を苦め、家名を汚し、子孫を辱しめ、社會を毒するので、實に憎みても憎みても餘りあるのである。世の女房たるものは、須らく貧乏に安んじて辛棒すべきである。「人毎に一つのくせはあるものをわれにはゆるせ夫を尻に敷島の道」などという空嘯くに至つては、良人を隨行として道行く、支那の女以上の憎さである。

何時やら萬朝報に女性に就いての一口評見た様の募集があつたが、其中に「女と酸漿は口から破れる」といふのがあつた。女の口は何れの國でも禍の門たるを免れぬと見える。次ぎに「金の指輪をかける女は、鐵の鍋を賣る」といふ頗る振つたものがあつた。全く其通りで、實に能く穿つてゐる。又朝報の其れであつたか、別の雜誌だかに「女の鼻にかゝるもの」として、奇抜なものがあつた「先づ鼻にかゝるものが自分の容色、鏡を見ること、一日正に七十回」。次ぎは「所持の衣類、羽二重の綿入紋付を所持してゐるの故を以て、盛夏酷熱の土用中に、之を着て鄰人に見せたといふ」。次ぎは「わが子、曰く宅の子供は利口にして健康で、立ぬうちから匍匐つて歩くと誇つた」といふのである。是れが即ち現代女性の思想であり、性格であるといふのであるから只々恐れ入るの他ないのである。斯ういふ女性は、無論神を敬ふなどいふ至誠は藥にしたくもないのである。土臺頭の中に神といふ觀念など浮ばぬのである。其浮ぶのは自己の虛榮贅澤を満足したいといふ所から、淫祀邪教に私的祈願をすることである。眞に敬神の至誠がないものにして、君父祖先の恩を感謝報賽するの觀念がある道理はない。勿論社會共同生活の徳に報いんとする考へなどは尙更の事だ。斯くの如き女性が家庭の王として、子女を教育するとなつたならば、其結果は如何であらう。天下を亡

すものは敵國ではない、國家を破壊するものは敵彈でない。實に敬神の誠なき新しい女性である。純忠至孝、貞淑温良の美徳を失へる新しい女性であります。

結 論

一、最も安全なる生活

以上説き去り、説き來りたる所によりて結論を下せば、吾等は神を忘れて活動すること出來ず、神を離れて生存する事能ぬといふのである。反言すれば吾等の實際生活は、神を敬ふによつて生き、神を尊ぶによりて活くといふのである。更にいへば、敬神の實が、吾等の實際生活の上に實現し、顯現し、充實するにおいて、始めて敬神は我國固有の美風なりといひ得るのである。然るに世人動もすれば、神は非常に遠方にあるものにして吾等の實際生活と何等關係なく没交渉のもの、如く考へるものがある。是れは大なる誤りで、若し果して然うだとすれば、敬神そのものが己に何等の價値なきものとなると同時に、吾等の生活は死の生活となり、無意義の生活となり、動物的生活と擇ぶ所がないとなるのである。加之吾等が神の懷に生存し、常に神と同一體にあるといふとは最も自然の生活にして、而て最も安全な生活であるのである。猿は樹上に棲み、鮒は水中に泳いで居るが最も適當にして安全の生活であるが、若し猿が水中に在つては如何に巧智なりといへども鮒に勝てぬ。獅子は百獸の王として猛を誇るけれども、暗黒なる土壤中に置けば窒息して直ちに死ぬので、蚯蚓に劣るのである。吾等が神と同一體に在らず、神の懷を離て生活せんとするは、恰も猿の水中に棲み獅子の暗黒なる土中に活きんとすると同じて、三歳の童兒も其愚を嗤ふに躊躇せぬであらうと思ひます。

二、精神生活と動物の保護色

又動物には其生活を安全ならしむる爲め、其體毛色を常に天然色と同一色彩に在らしむる天然の保護色がある(ダーゲキヤン)。即ち蝗は稻の色に似、蝙蝠や、梟は夜色に似て灰色或は黒色、日本及歐羅巴の大陸の高山に棲む雷鳥は、四季毎に其毛色を變化するといふことである。海中の動物も同じで、大洋の水面に浮遊するグロークラス、アトランチカスといふ動物は、其脊は青色であるのに、腹の方は白色で、上から見れば海水の色と同じく、下から仰げば大空の色と異ならぬといふ。そして大概熱帯の海に棲む魚類は赤く、大洋の魚類は白色或は青色であつて常に海色と一致してゐるといふことである。又蟲類なども同様で一般に平行脈の葉に住む虫の斑紋は平行状で、網脈の葉に留る虫の斑紋は網状になつてゐる。虎の黄黒色の斑紋も其理に他ならぬのである。枝尺取虫が四十五度の角度に體を構へて、桑の枝に止つて居るのを、農夫が桑の枝と誤つて土瓶を吊して割らされるので、一名土瓶割りといふさうである。蝶類の翅の裏面は概して枯葉の色に似てゐるが、東印度地方から我國の琉球諸島にかけて産するカリマテフは、非常に巧に枯葉色に化してゐるさうである。其他何れの動物も皆然うである。是れ皆他の動物若くは人間の攻撃侵略を豫防する爲の天然的保護色である。尤も虎の如き猛獸は他の動物が其虎たるを知らずして近づき來るを待つて餌にしようといふ爲ださうであるが、何れにしても生活の安全を圖るための方法たるに於いて異ならないのである。此頃軍人がカーキ色の保護色を着てゐるのも其理けである。歐洲の戦場で斥候兵は樹の枝葉の色と同じ着衣をして、樹上に在つて偵察してゐるさうである。即ち神は無智なる動物に、其肉的生活の安全を保たしむる爲に、常に憐れいふ天然色と一致することを教へ給うたのであらう。去れば意識あり智慮ある吾等人類が、精神的生活の安全を圖るに於いても亦同一理由で説明が出来るのであるまいか。即ち吾等の實際生活は常に神の懷に生存し、外から視れば全く神と同一體になつて、其行爲が總べて神の如く見えなければならぬのである。そこに吾等の人格が生れ、そこに吾等の道徳が顯れ、國民として臣民としての價値が伴ふのであります。

三、敬神思想と自然淘汰

ところが今日は動もすれば神を忘れ、神を離れ、神と遠ざからんとする傾向が大に見えるのである。即ち敬神の良風美俗が大に衰退せんとしつゝあるのである。更にいへば敬神の思想、敬神の觀念、敬神の至誠が段々薄くなりつゝあるのである。是れは實に憂慮すべき事であつて、慙ういふ思潮が子々孫々相繼いで流れてゆけば遂に固有の美風は絶滅するに至るのである。或は曰く、敬神の良風美俗は、我國民特殊の國民性の顯現であるから、吾等の體質即ち皮膚毛髮の色、四肢五官の貌が遺傳する如く、此國民性も必然的に遺傳するものである。故に何も八釜敷いうて心配することはないといふものがあるけれども、是れ其一を知つて未だ其二を知らぬものである。成程國民性の素質は遺傳するけれども、其完成は後天的の教育修養に俟たなければならぬのである。これも亦動物の自然淘汰の理法から観ることが出来ると思ふ。即ち動物の器官は其使用不使用、必要不必要に由つて進化もし退化もするのであることは皆人の知る所である。例へば亞米利加のケンタッキー州にあるマンモス洞は洞内が深く太陽の光線が射し込まない爲めに、そこに棲む動物は眼を以て物を見る必要がなくなり、目が遂に退化して盲目となつたので、進化學上有名ださうであるといふが如き、其他土龍^{モグラ}及蝙蝠の目や、蛇の足など皆不使用から或は盲目となり或は廢滅したのである。麒麟、鶴、駝鳥の頸骨や、亞刺比亞馬の四肢、鎌切の前脚、人間の頭腦、盲人の觸感等は必要上から段々發達したのである。慙ういふ動物の自然淘汰の結果と同様に、我敬神の良風美俗が、子々孫々の時代に至り、全滅するが如きことあるとせば、實に天下國家の一大事である。何となれば敬神の良風美俗は、第一章に述べた如く、寔に國家の生命にして、國家存立の基礎であり、爲政の要道にして國家最善の

至寶なるが故である。然れば吾等國民たるもの今にして大に覺醒し、大に反省し、其實際生活上に敬神の實を實現し、顯現し、充實して、益々其良風美俗たる特色を發揮しなければならぬのである。現今に於ける世界の大事に鑑みて一段と其必要を感じるのである。動物の保護色や自然淘汰の道理は、小學生徒も尙よく知つてゐることであるが、斯ういふ平凡にして而も道理ある事柄から、考へを起してもらふといふことは頗る必要の事と思つて特に引合に出したのであります。

辨 明

本書第二章第一二節皇室と諸神の條に、「古典に「大御神」と誌し奉りてあるのは、必ず天照大御神の御事である」といふのは、天照大御神のみは多くの場合大御神と申し上げるので、自然大御神と申せば、天照大御神の御事といふのであつて、他に絶對に大御神と申した例がないといふのではない。尤も古事記に、伊邪那岐神を大御神と申せし所あるも、こは天照大御神生成後始めて申したので、つまり天下の主たる天照大御神の御事といふところから、特に尊みて申したものと拜して差支なからう。他は古事記に、阿遲鈕高日子根神を「迦毛大御神」といふ所一つある。又萬葉五雜の好去好來歌に「諸能大御神等」、同十九贈三入唐使一歌に「疊吉乃吾大御神」などある。思ふに古へは、或場合に非常に尊敬の意を表する時に、何れの神にも申したので、即ち天照大御神のやうに尊いこの意であらうと思ふ。一寸誤解され易いと思ふから一言辯じておきます。

敬神と實際生活終

大正七年九月十五日印刷
大正七年九月十八日發行

不許
複製

定價金八拾錢
郵稅金四錢

編輯人兼
印刷人
當山春三
早坂亥質
早川活版所
仙臺市片平丁四五
電話八六〇番

發行所 神宮奉齋會宮城本部

發賣所 英華堂鈴木書店
仙臺市大町五丁目二一五
電話一三六番
振替口座二八八四番

發賣所 誠之堂伊藤岩治郎
東京市神田區鍛冶町四番地
振替貯金四七七二番
電話神田九四九番

324
579

Handwritten text in Chinese characters, including a date and a signature, with a faint rectangular stamp or seal impression.

終

